

永禄三（一五六〇）年五月十九日（現在の暦では六月十二日）に、織田信長軍と今川義元軍が尾張国（愛知県西部）の桶狭間で激突した「桶狭間の戦い」は、我が国の戦史上で有数の「番狂わせ」の合戦です。

今川義元は、駿河（静岡県中部）を本拠地に遠江（静岡県西部）・三河（愛知県東半部）までを領有する東海地方最大勢力の戦国大名であったのに対し、織田信長は尾張一国すら統治できていない弱小勢力でした。

合戦の記録は様々にありますが、今川軍は二万五千～四万五千人の兵力で尾張に侵攻します。迎える織田軍は僅か二千人の兵力だったそうなので、この戦力差は今川軍の「優勢」ではなく、合戦前に「勝利」が確定しているような数です。迫りくる大軍勢を前に織田家の家臣団は「出撃」か「立て籠もり」かで意見が分かれます。

そうした状況の中、前夜まで今川軍接近の知らせを受けても動かなかった信長が、十九日の明け方に身の回りの世話をする家臣数人を引き連れて突如出陣します。桶狭間までの行軍中に軍勢を整え、午後一時過ぎに休息中の今川軍を急襲し、見事に義元を打ち取ってこの合戦に勝利しました。

注目すべきは、圧倒的な戦力差を前に信長が、いつ迎え撃つと「決心」したのかです。十九日の明け方に突然「決心」したとは考えにくいですが、義元が居城の駿府城を出陣したのが五月十二日と記録されているので、仮に十九日早朝の「決心」だとしても「出撃」「立て籠もり」「降伏」の選択



「まずやってみる」ことで「心」が定まる

に対する思考の時間は僅かです。家臣たちが揉めている間に「決心」していたとするなら、もっと短い時間でその判断を自分の中で下していたということになります。では、この「決心」は間違いなく勝てるという確証を持って下されたものだったのでしょうか。今となっては信長の胸中を聞き出す術はありませんが、戦力差や準備に要する時間の無さなどを鑑みれば、勝てるという確証は無かったと推測されます。

『万人幸福の栞』第十五条に「決心の強いか弱いかによって、仕事の成否がきまるが、決心ということは、今までなかった事を、こうしようと信念を定めることである」とあります。この一文からすると「決心」とは今までに経験したことでもなくとも「信じる」ことによって「心」が定まる（決まる）ことだということが分かります。「決心」できる好条件が整ったから「決心」するのではないのです。

とはいえ、思考することを義務付けられているかのような現代人は「決心」できる条件を無意識に求めてしまうのでしょうか。そんな時は、第一週配信の「丸山竹秋のこぼ」にもあったように、どんなことでも「まずやってみる」という「実験」をすることが効果的な方法といえます。

桶狭間の戦いのような一大事での「実験」はなかなかできませんが、日常平時の中にある様々な場面で「まずやってみる」の姿勢で臨み、「実験」を重ねて「決心」に至る「信じる」力を養いたいものです。